human

No230

2011／6

医療を通じて人と人とのふれあいを広めるために
ヒューマン(人)と名付けました。

「開院当初」

救急指定・労災指定病院 さくら総合病院 愛知県丹羽郡大口町新宮1-129 (0587)95-6711(代)

老人保健施設 さくら荘 愛知県丹羽郡大口町新宮1-96 (0587)95-6722

訪問看護ステーション あすかビレッジ 愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8623

ヘルパーステーション あすかビレッジ 愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8026

居宅介護支援事業所 あすかビレッジ 愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8027

デイケアセンター 御嶽 愛知県丹羽郡大口町新宮1-129(さくら総合病院2F) (080)5294-5728

有料老人ホーム 太郎と花子 愛知県丹羽郡大口町新宮1-10 (0587)95-0111

http://www.ijinkai.or.jp

E-mail:info@ijinkai.or.jp

私の生い立ち その一 生誕から小学校

外科部長 小林 豊

私は、名古屋市中村区、名古屋第一赤十字病院に産まれた。そこは、かの太閤、豊臣秀吉の生誕の地のすぐ傍であった。そのため、私は、秀吉の一字をとって豊、と名付けられた。戻らぬ逆子であったため、帝王切開で産まれた。今は老いた母の下腹部には横切開の傷跡がついている。文字通り母の腹を痛めた子、なのであろうか？胎児のときにとある産婦人科医がレントゲン撮影で何の拍子か私の頭が写らず、我が両親は「無脳児だからあきらめなさい」と言われた、という。つい最近まで、両親はその時の医師の診断は正しかった、と私を謗った。

私が産まれた月の初めから、父は東京の築地にある国立がんセンター（現在の国立がん研究センター中央病院）へ武者修行にでていた。そのため、父が帰名する土曜日に合わせて私は母の腹より引っ張りだされたわけである。首が据わるのを待って、幼き乳飲み子は東京の地を初めて踏んだ。しかし当時も家賃の高い東京の中心地に生息したわけではなく、子供の健康を考えて、という大義名分の下に、横浜は日吉の地で寝起きした。今も昔もがんセンターでは平日に家に帰れるわけはなく、週末だけ会える親父の顔でも久々に会うと掛け値なく「ニヤッ」と笑ったと言う。他の男であっても同様な笑顔を振りまいていた疑惑はあれど、あの頃は可愛かった、と両親は言う。今も変わらず可愛い、という自負はある。

東京に移って間もなく、風邪を引いた私は、近くの医師の処方を受けたが、その分量の間違いから瀕死の状態となったらしい。当時の国立小児病院（現、国立生育医療研究センター）に入院し、重症管理となった。両親は当時の担当医に、あまりに重症であったため、「もうあきらめてください」と言われたという。どうも世間から見放されることが多いようだ。そんな私を見放さなかったのは、他でもない両親であった。その想いが通じたのか、私はまだ神からは諦められていない。

3年間の日本のがん医療の最高峰で研鑽を積んだ父は、がんセンターで更に上の立場を任せるから残れ、という上層部からの勧めがあったが、祖父の心筋梗塞をきっかけに、止むなく帰名の道を選んだ。父は名古屋掖済会病院・名鉄病院での勤務と同時に医学博士の学位研究に勤しんでいたが、このころの私の記憶と言えば、蜂に刺されてトラウマになったことと、幼稚園でスカートめくりをしていて先生に怒られたことくらいであろうか。前者はいまだにトラウマで、蜂はいまだに苦手で今でも遭遇したときだけはウサイン・ボルトとなる。ちなみに後者は全くトラウマになっていない。全く、である。

学位取得を果たした父は、岐阜県関市の中濃病院での勤務となった。ここで私は小学校へ入学した。小学校へ通う私は、連なる蟻のあとをただひたすらついていったり、水たまりに生息するオタマジャクシの後ろ足が生えてくる様・前足が生えてくる様を毎日観察していたり、とのどかな幼少期を送った。ある日当時の中濃病院の院

長が酔った勢いで私に天体望遠鏡をくれた時があった。次の日の朝、酔いの醒めた院長からの要請で、一瞬私のものとなった天体望遠鏡は、あっという間に元の持ち主の所へ戻って行った。幼心にも大人の調子の良さには憤りを感じたものだった。

小学校一年生の一学期を関で過ごし、愛知県丹羽郡大口の地での父の開業に伴って新築の診療所の裏に居を構え、大口北小学校に転校した。この頃の私は、ただひたすら遊んでいた。病院の裏の農業用水では、いくらでもザリガニが捕れた。夏の夜は蛙や虫の大合唱が子守唄だった。秋には刈った後に積まれた稲が僕らの要塞だった。要塞の稲を一束二束中抜きすると、そこに開いた穴が外を見る覗き穴となり、敵の襲来をうかがった。その頃の敵は大人であった。今から思えば、農家の方々が整然と積み上げた稲で遊び、散らかすわけだから、敵に怒られるのも無理はない。こんな要塞も我々には死守するまでもなく、いつのまにか一掃され、冬を迎えるのであった。

開業当初は大口外科クリニックであった。12ベッドを有するだけのこじんまりしたクリニックだった。しかし、父のspiritは今も昔も同じであった。今とは台数もその内容も異なれど、救急車は一台も断らず、外来も一人でこなした上に連日当直の状態であった。私は同じ家に住みながら、3ヶ月一度も会わないことすらあった。そんな父とのコミュニケーションは文通であった。文通で算数を教えてもらったのを、いまでも克明に覚えている。学校帰りにふとクリニックに目をやると、窓越しに白衣を着た父が廊下を歩くのが見えた。家族での旅行はもちろん、家族で買い物にでかけることすらままならなかった。久々に名古屋に家族で買い物に出ると、必ずと言っていい程、父はポケットベルで呼び出され、そして私の前から消えて行った。でも、そんな生活しか知らなかったから、私の中に不満はなかった。呼び出されるたびに、逆に必要とされている父を誇りに思った。

しかしながら、現実は厳しかった。病院の息子であるという理由だけでいじめられた。とある同級生から「お母さんが、君の家の病院で中学生が死んだから、もう君と遊んじゃダメだって。」と言われた。え？なんで？と思った。集団投下校の毎日では、上級生にお腹を殴られたり、蹴られたこともある。でもこのことは、親には言えなかった。休みなく働く父はおろか、その父に合わせて過酷な環境で頑張っていた母にも。そんな虐めはそれほど長くは続かなかった。4年生になって名古屋へ転校したのである。辛いのは私ばかりではなかったようである。当時は当院に来ないで近くを通過する救急車も少なくなかったが、その救急車の音で父は十分に眠れなかった。父も追い込まれていたのである。病院の規模の拡大に伴い、アルバイトの医師が当直してくれるようになっていたが、それだけではだめであったのだろう。両親が名古屋への転居と毎日の通勤という決断を下したことで、私の環境も変わった。もう虐められなくなった。名古屋では親の仕事でとやかく言う同級生はいなかった。母の友人の勧めで、塾に通うようになった。いまでこそ中学受験をする人も増えたが、当時は名古屋でも少なかった。忙しい父とどこかに行くわけでもなかったので、それほどの我慢もなく、勉強していた。このころになんとなく頑張っていた勉強が私の人生を大きく変えることになるとは、誰も思ってもいなかった。（つづく）

～検査における被ばくとは？（医療被ばく）～

放射線部　立川　雄太

東日本大震災においていろいろ報道されるニュースのなかでよく騒がれているのは、福島原子力発電所の事故による放射能漏れです。みなさん拝見された方々は、少なからず不安になったと思います。しかしながら、原子力発電所の事故による被ばくと医療を行う上での被ばくは違うものなのです。

今回の原子力発電所の騒動によって放射線を使った検査による医療被ばくの量を調べて知った方も多いと思いますが、医療被ばくというものにはそもそも線量の上限を定めてはいません。

日本での医療被ばくの量は世界の平均に比べても多いと言われています。これは普段私たちが生活している中で被ばくしている自然放射線による被ばくとだいたい同じくらいです。それと同時に日本は長寿国家です。これにより日本人が長生きしていると言っているわけではありませんが、医療被ばくは少なからずこれを反映しているものと思います。これは患者にとって直接的ではないが、間接的に利益をもたらしているからです。

何故医療被ばくには上限を設けないのかというと、放射線を使った検査を行うことにより受ける医療被ばくには明らかな個人の利益があるからです。いろいろなX線を用いた検査を行うことにより、早期の段階で病気を発見できたり、治療方針を確立したりすることができます。これは放射線の検査を行うことにより身体へのわずかなリスク（リスクが本当にあるか確実ではない）を心配するよりも患者さんの生活にとってより良いものを与えてくれるからです。

また一方で、原子力発電所による放射能漏れによる被ばくは身体に影響がでる確率が増えるのみで、まったく利益を伴いません。よって今回の医療被ばくと原子力発電所による事故の被ばくは比較するものではないと思います。

CTの検査を施行したり、X線の検査を施行した事により「癌になる確率が上がる!癌になってしまう!」といったことだけではないということを理解してほしいです。

我々は医療従事者であり患者さんにとって無駄な被ばくは常に避けるように努力しています。患者さんにとって利益なのかリスクなのかを常に天秤にかけ、よりよい医療により、人生のプラスになるようこれからも精進していきたいです。

介護の現場

有料老人ホーム　太郎と花子
事務長代行　岡地　徹

3月に太郎と花子に配属され、早二ヶ月が経ちました。簡単に自己紹介をしますと、私はもともと医療・介護の業界は全くの未経験ですが、地元地域に貢献したいという思いで、縁があって働かせて頂くことになりました。

わずか二ヶ月ではありますが感じたことは、住宅型有料老人ホームで働くということは入居者様やそのご家族様に「家族」として認めて頂くのが一番重要であるということです。入居者様やご家族様は入居を検討される際、様々な不安を抱かれております。「日々退屈しないだろうか」「医療依存度が高いが大丈夫だろうか」など。これらを払拭するためにも、まずは今いる入居者様と毎日顔を合わせて、日々感じていらっしゃる思いを直接お伺いすること。その中には厳しいご意見も多く頂きます。ただそういった声を現場に反映させることで、充実した日々をお過ごし頂ける「家」になっていくと思います。

先輩方からはもちろん、入居者様やご家族様からも多くのことを学び、質・数ともに日本一の老人ホームを目指して業務に励んでいきます。

★健康を守る教室からお知らせ★

毎月第4土曜日に開催している「健康を守る教室」が6月で第8回目を迎えます。

参加者の方も多くなり、「毎月の教室を楽しみにしてるよ」と言われる患者さん、ご家族、地域の方々にやりがいを感じています。一方「教室が開催していたのを知らなかった!」と言われる方もみえ、多くの方に参加していただけるよう、今まで開催した教室の様子を掲載いたしますので、ご覧ください。

第1回　「メタボリックシンドロームとお食事アドバイス」（10月開催）
第2回　「糖尿病にならないための生活習慣の見直し」（11月開催）
第3回　「すぐ使える食事お役立ち情報～カロリーダウン編～」（12月開催）
第4回　「検査データが教えてくれるあなたの健康～脳卒中編～」（2月開催）
第5回　「すぐ使えるお食事お役立ち情報～コレステロール編～」（3月開催）
第6回　「検査データが教えてくれるあなたの健康～心筋梗塞～」（4月開催）
第7回　「すぐ使えるお食事お役立ち情報～減塩扁～」（5月開催）

皆様のご参加をお待ちしております! またもう一度聞きたいなど、ご意見がありましたら、遠慮なくお申し出ください。

第8回　「健康を守る教室」

テ　ー　マ：『検査データが教えてくれるあなたの健康』～動脈硬化完結編～
　　＆セラバンドを使用した体操
日　　時：平成23年6月25日 土曜日
　　13:00～14:00（受付12:30～）
場　　所：新館1F
講　　師：診療放射線技師　塚田
　　臨床検査技師　佐藤
　　理学療法士　磯村
参 加 料：無料
お問合わせ：受付窓口もしくは医療連携室
　　Tel　0587-95-0015

☆ 検査データからわかるあなたの健康を専門技師から分かりやすくご説明します。
この機会に、お気軽にご参加ください。

※健康を守る教室の体操コーナーでおなじみのセラバンドを健康教室終了後に下記価格で販売をいたします。
ご希望の方はお申し出下さい。　　黄色（弱）400円　緑色（中）460円　青色（強）520円

診療科表

平成23年6月1日現在

	午前 9:00～12:00										午後 5:00～7:30									
	外科	内科	整形外科	脳神経外科	小児科※3	皮膚科	耳鼻科	泌尿器科	婦人科	眼科	外科	内科	整形外科	脳神経外科	小児科	皮膚科	耳鼻科	泌尿器科	婦人科	眼科
月	○	○	○	○	―	○	○	○		○	○	○	○	○	―		○ 5:30～7:30	○		
火	○	○	○	○	―	○	○	○		○	○	○	○	○	―		○ 5:30～7:30		○ 6:30～7:30	
水	○	○	○	○	―	○	○	○	○ 9:00～11:45	○	○	○	○	○	―	○ 5:00～7:00	○ 5:30～7:30			
木	○	○	○	○	―	○	○	○		○	○	○	○	○	―		○		○ 6:30～7:30	○
金	○	○	○	○	―	○	○	○		○	○	○	○	○ 6:00～7:30	―	○ 5:30～7:30	○ 5:30～7:30	○		○
土	○	○	○	○ ※2	―	○	○	○		○										
日	○	○	○※1				○													

※1 休診日もございます
※2 第2、第4 は11:30までとなります
※3 小児科は、3月9日（水）より休診とさせていただきます
● 診療時間に関しては受診されます診察科目により異なります
ご不明な点がございましたら職員に確認してください
● 診療日が変更になる場合があります ご了承ください

機関紙 human ヒューマン No.230
発行 医療法人 医仁会 さくら総合病院
丹羽郡大口町新宮1-129
電話 0587(95)6711(代)
発行年月日 2011年6月1日
発行部数 250部